３　講演録

「一人ひとりが，みんなたいせつ～作品に託す願い～」

児童文学作家　　くすのき　しげのり

みなさん，こんにちは。くすのきしげのりです。

令和３年度親子読書研修会にお招きいただきありがとうございます。本来なら，会場に行って，みなさんに直接お目にかかってお話をということですが，新型コロナ禍にあってオンラインという形になりました。御了承ください。

昨年は，いろんな行事やイベントをするかしないかの二者択一でしたが，今年になってからはどういうふうにすればできるのか，いろんなことを考えながら講演をしています。このオンラインでの講演というのも，そういうアイディアの一つです。

今，言いましたように，このコロナの影響，去年から今年にかけて，本当に生活が大きく変わっています。その中にあって，家庭で本を読むということが，非常に大きな意味を持つようになっています。そうしたことを考えると，今日，すばらしい発表と実践を見せていただきました。できたら一度鹿児島に行って温泉にも入って，ゆっくり話したいなという気持ちになるぐらい，すばらしい発表，実践でした。みなさんのところで一緒に，子どもたちに向けて，読み聞かせなんかをやれたらいいなあということも感じました。何よりも作品を書く作家として，読み聞かせをはじめ，いろいろな活動を頑張っている報告，非常に，そして本当に刺激を受けるものでした。

さて，今日は，「一人ひとりがみんなたいせつ～作品に託す願い～」ということでお話をさせていただきます。

普段，みなさんはたくさんの本を読まれていると思います。そして，子どもたちに向けて，或いは活動の中で，本を誰かに読むということが多いと思います。今日は，読んでいるのを聞くという立場で，この時間をゆったりとお過ごしいただけたらと思います。今日は作品をたくさん用意しましたので，ゆっくりとお楽しみください。

それでは，まず，一番最初に，私の作品の中で一番読むのが難しい作品から紹介させていきます。『おかあしゃん。はぁい。』という作品です。

【くすのき先生による『おかあしゃん　はぁい』の朗読】

『おかあしゃん　はぁい』でした。

この作品は，実は私が東京から徳島に帰る夜の飛行機に乗ったときに，私の後ろに２歳ぐらいの子どもを抱いたお母さんが座ったんです。夜の便でしたから，眠たかったんでしょうね。その子は，「おかあしゃん」と眠たそうな声で呼ぶんですね。すると，お母さんは，周りの迷惑にならないように小さい小さい声で，「はぁい。」と返事をするんです。それがずっと続くんですね。あ，もう寝たのかな。声がしなくなったなあと思ったら，また思い出したように「おかあしゃん」と言うと，またお母さんは小さい小さい声で，「はぁい。」って返事をするんです。こんな幸せな会話，他にないなと思ったんですねえ。全幅の信頼を置いてお母さんを呼ぶ，そして，全てを受け入れて返事をする。本当にすばらしい会話だと思いましたね。

考えてみると，そういうふうな環境にない子どもたち，そういうふうな状況にない家庭というのも，今，多くあるわけなんです。子どもたちに関わっているみなさんなら分かっていただけると思います。なかなかね，そうではないという家庭状況もあったりするわけなんです。

私は小学校の教育の現場にいて，そして鳴門市の図書館の副課長になって，そして，また現場に出て，現在は作家となっています。

私は作品の中にいろんな思いを込めます。

例えば，ちょっと返りますが，この作品の中にも，「おとうしゃん」は１箇所しか登場していないんですね。お父さんは子育てにあまり参加してないのかという意見もあったりしますが，実はそうではないんです。

例えば，食事の後，お母さんと一緒にお風呂に入ってますね。一番最初のアイディアでは，お父さんと一緒にお風呂に入って，そしてお母さんを呼んで拭いてもらうというに想定していたんです。私の家がそうでしたからね。

でも，食事の後，お母さんと一緒にお風呂に入っているということはどういうことか。

お父さんが後片付けをしているんです。もちろん歯磨きの指導なんかも，仕上げ磨きをしていますね。

この作品もそうですが，本を読む，絵本を読む。特に絵本なんかの場合は，文章だけでなく，絵の中にいろんな情報が隠されています。今日は，そういうことも楽しんでいただきながら進めていこうと思っています。

みなさん，徳島にこられたことはあるでしょうか。これが，私の仕事場から見える風景です。向こうに見えるのが「びざん」，眉の山と書きます。こういう風景の中で仕事しています。目の前の田んぼには，コウノトリが近くに巣を作っていますので，エサを食べに来ています。

作品を書き始めたのは，徳島県立城北高校の文芸部に所属していたころです。その頃はいろんな作品を書いていました。教員になって次第に子どもに向けての作品というのが中心になってきました。そして 50 歳を前に退職をしました。これは人生の時間のたいせつさということについて考えてからです。これはまた後程詳しくお話をしましょう。

先ほどの実践の発表も聞かせていただいたのですが，いい作品を読むっていうことは心の窓を開く。子どもが読めば，子どもの心に響く。大人が読めば，大人の心に響く。そういう物語の力のある作品を目指して，私はずっと書いています。ですから，親子読書を考えたときに，例えば，絵本を読む，いろんな児童書を読む，或いは，大人の本を読む，子どもと一緒に読みながら考えることができるものもたくさんあります。

例えば，絵本，子どもに読むもの，或いは子どもだけのものではないということ，これはもう私が言うまでもなく，みなさんしっかりと，分かっていただけていると思います。

私の作品，表紙だけですが，スライドを送りながら見ていきたいと思います。おそらく，「これも読んだことあるな」っていう作品があると思います。

私は絵を描きません。文章だけです。ですから，これもそうだったのかと思う作品があるかもしれせん。

赤い印がついてるのは，読書感想文の課題図書になった作品です。読まれたことのある作品が多いと思います。『おこだでませんように』。こうして見ていくと，絵を描いた人が違う。だから，みんな印象が違うんですね。

『「あそぼ」やで！』この作品の画家はこうの史代さん。こうの史代さんは漫画家です。『この世界の片隅に』とか，『夕凪の街　桜の国』といった非常にクオリティの高い，いい漫画を描かれていますね。こうの史代さんが描いた絵本というのは，おそらくこれだけではないかと思います。

いろいろな画家の方に書いていただきながら作品を出版しています。

０歳から，それから幼年，或いは小学校の低学年，或いは大人まで読めるような，これは『交響曲「第九」歓びよ未来へ！』，私の故郷，板東にあった，ドイツ人俘虜収容所の物語なんですね。これは子どもから大人まで読める作品なんです。

『たべる たべる たべること』。実は６月は食育月間なんですね。これも食べるっていうことを題材に主人公の女の子の成長とともに描いた作品です。『6600 万年……、ぼくは恐竜だったのかもしれない』。この恐竜のお話なんか，男の子は好きですねえ。

それからシリーズの絵本もたくさんあります。『もぐらのサンディ』。これは私の一番最初の絵本です。このシリーズが全部で４冊。『ぼくが おおきなったら』。いもとさんとのシリーズも全部で 10 冊あります。『ともだちやもんな，ぼくら』のシリーズが３冊。『ええところ』。これは，小学校の教科書に載っています。『ええところ』のシリーズが３冊，それから「すこやかな心をはぐくむ絵本」のシリーズが全部で 12 冊あります。12 冊目，一番最後の『あったかいな』。これは片山健さんの絵です。『いちねんせいの１年間』のシリーズ，これは全部で６冊あります。

いいですね。こういうふうに見ると，たとえばこれは，よしながこうたくさんの絵だっていうのが分かりますから。私なんかは，読んだ後で気が付いてもらうことがあればいい方で，読んだ後でも気が付いてもらっていないということもありますので，みなさんぜひ絵本を見るときには，作者の名前もちょっと気にかけていただけたらありがたいです。

それから，『ひとりでえほんかいました』。これは「子どもの初めて応援シリーズ」です。これは全部で３冊。「学校がもっと好きになる絵本」のシリーズ，これは全部で４冊あります。フレーベル館から「世界名作童話のようなお話をお願いします」と言われて，書き始めたシリーズ，『うでのいいくつや』，『はだかのおうじさま』，『マッチやのしょうじょ』。これは，あと２冊，今準備しているところです。『あっ！みーつけたっ！！』のシリーズが，『おにいちゃん さんかんび』，そして，今３冊目を書いています。『おかあしゃん。はぁい。』これも続編が出ます。『Life(ライフ)』，これは大人の人に人気の絵本です。これもシリーズで考えています。

それから，親子読書で考えたときに，絵本だけではなく，こういう読み物も楽しんでいただくことができます。『みてろよ！とうちゃん！！』，『まかせて！かあちゃん！！』，今，３作目を書いています。『こうちゃんとぼく』，『おにぼう』，『やさしいティラノサウルス』，『はじけろ！パットライス』，『ニコニコ・ウイルス』，『ネバーギブアップ！』，『三年二組 みんなよい子です！』，『三年一組 春野先生！』，『フルスイング！』，『空手，はじめます！』，『ジャンケンの神さま』これなんかはもうゲラゲラ笑うお話を書こうと思って書いた作品です。

『短編集　海の見える丘』。これは，一昨年つくった作品ですが，絵のない絵本です。文章だけで，空間をしっかり取っています。ぜひこれもみなさんに手に取っていただきたい作品です。どんな場面，どんな情景が，みなさんの心の中に立ち上がってくるのか。それで，この絵本は完成ということです。収録されてる五つの物語は，その後それぞれ絵本として描かれています。ですから，ご自身が想像したものと，画家の人が考えた情景との違い，共通点なども見つけていただけると思います。これは田村セツ子さんの絵ですね。『星のなる木』。

私の作品の多くは，何も特別な魔法使いが出てきたりとか，急に不思議な力がついたり，そういうことはあまりないんですね。みなさんが普段接している子どもたち，その子どもたちの日常の出来事，その中で揺れ動く心，そういうようなものをテーマにしたものが多いです。そして，作品に合った画家の方々に書いていただいています。

作品を読むときに，「想像する力」，「共感する力」で作品の世界は大きく広がります。絵本，児童文学作品を読むとき，子どもも大人も，この２つで世界が大きく広がります。読書を楽しむことには「心の窓を開く」，そういう力があると思います。そして，人生を豊かにしてくれます。

もちろん読書の効能はたくさんあります。子どもに読書を勧めるお父さんお母さん方が思うように，文字を覚える，知識が増える，情操が豊かになる，いろんな効果が，当然それはそこにあるわけなんです。でも，まずは，自由自在に作品を楽しむというところから，子どもたちと作品・本と出会わせてあげて欲しいなと思います。もちろん，みなさん自身も本を楽しんでいただきたい。それは本当に思います。

今，作品のデジタル化が進んでいます。紙の本のよさを言う人もたくさんいます。ただデジタル化が進んでいくっていうことは，抗しきれない流れであると思います。だからこそ，紙の本を読む楽しさ。紙の本を読むときは五感を刺激されますね。本の質感，それから紙の手触り，ページをめくる音，或いは，古い本のにおい，新しい本のにおい，いろんなもので五感を刺激されます。そういう体験を，子どもたちにはぜひさせてあげて欲しいなと思います。

もちろんデジタルのいい面もあるわけなんです。紙の本で廃版になった，廃刊になったものも，デジタルでは読める。そういうよさもあったりします。海外のものもすぐに読める，そういうよさもあったりします。

ですから，この両方のよさを生かしていきながら，これからの読書活動というのは進んでいくんだと思います。

でも忘れてはいけないのは，もう一度いいますが紙の本のよさをしっかりと，子どもの時に体験させてあげて欲しいということです。これは作者としても，作家としても，本が好きな一人としても，願うことです。おすすめカレンダーなどもありますので，ぜひ参考にして読んでみてください。

では，せっかく今日は作者が話すんですから，ちょっとねえ，秘密もお話をしておきましょう。

私の作品は，いろんな作品の登場人物が繋がっています。

例えば，『ええところ』の「あいちゃん」，当然これは『へなちょこ』の「ともちゃん」と同じクラスの友達です。『ひとりでぼっち』の「はなちゃん」とも同じクラスの友達です。実は，その学校には，『おこだでませんように』の男の子も通っています。ホンマかいなと思うでしょ。作った本人が言っていますので，これは本当のことなんです。

その同じ小学校に，『あっ！みーつけたっ！！』のお兄ちゃんも，『ふくびき』のお姉ちゃんも通ってるんです。『ごめんなさいがいっぱい』に出てくるお姉ちゃんも通っています。一つ上の学年には『ともだちやもんなぼくら』の男の子たちがいます。『「あそぼ」やで！』の２人も一つ上の学年にいるわけです。

また，作品を超えて出版社を超えての成長というのもあります。『水色のマフラー』という作品の中に出てくる男の子たち，この男の子たちは大きくなって，５年生になって『ライジング父サン』という作品の中に出てきます。シンイチくんが主人公です。『ライジング父サン』では，山下先生という女の先生が担任してくれます。

『ネバーギブアップ！』という作品があります。腕相撲が苦手なジュンに，熱血の指導をしてくれる男の先生。山下先生といいます。ここで出てくる山下先生と，『ライジング父サン』で出てくる山下先生は夫婦なんです。ホンマかいなと思うでしょ。これも本当のことなんです。

そして，この熱血の山下先生に教えてもらって，僕も先生になりたいと思って，先生になった子がいます。『三年二組みんなよい子です！』のこの先生です。滝野先生といいます。

そして，滝野先生は，白鳥先生と結婚して，子どもができます。その生まれた子が『いちねんせいになったから』の男の子です。ですからこの男の子の名前は，滝野龍太郎君と言うんです。この『三年二組みんなよい子です！』の中で，滝野先生に教えてもらって，私も先生になりたいと思った女の子がいます。このサッカーボールを蹴っているこの女の子です。春野萌美ちゃんといいます。この女の子は，大きくなって『三年二組春野先生』で，ちゃんと先生になっているわけです。

こうした相関図がありますので，これは私のホームページからも，見られますので，また，興味のある方は，見ていただきたいと思います。こうしたことも紹介しながら子どもたちに読んだり，子どもたちと一緒に読んだりすると，また，楽しいかと思います。

「一人ひとりがみんなたいせつ」。「たいせつな存在である一人ひとりが輝きながら生きる」。これは私の作品の大きなテーマです。「一人ひとりがみんなたいせつ」っていうこと。よく，私たちは「今どきの子どもは」っていうふうなことを言いがちです。でも，普段，子どもに接しているみなさんだったら分かると思います。一人ひとりに一つずつ，その時々で揺れ動く心があるということ。私が教員になったころ，こういうことが話題になったんです。全国で。子どもが図工の時間に４本足のニワトリの絵を描いたっていう。そのときどういうことが言われたかっていうと，「最近の子どもは体験が足らんから，４本足のニワトリの絵を描いたりするんだ。もっともっと体験させなければいけない。」そういうことが言われたんです。

でも，最近読んだ本の中でこういうお話がありました。子どもが図工の時間に真っ赤なカラスの絵を描いた。その時も先生が，「どうしてこんなカラスの絵を描いたの。こんなカラスいないでしょ。」すると子どもが，「そうでしょ，先生。いないでしょ，先生，見たことないで

しょう。だから，僕，描いたんです。」
　実は，これも子どもの考えであるわけです。ひょっとすると，４本足のニワトリの絵を描いた子どもも，「こんな恐竜みたいなニワトリがいたら面白いだろうな」と思って書いたのかもしれない。
　私たちは分かっているつもりで分かっていないことがあるということを分かっていなければいけないんです。特に子どもと接する機会が多い私たちはそうなんですね。
　そんな思いで書いたのが，『おこだでませんように』です。ここからいくつか作品を紹介していきます。どうか，肩の力を抜いて，そして，ゆったりとお楽しみください。
　では読みます。

【くすのき先生による『おこだでませんように』の朗読】

　『おこだでませんように』でした。
　この作品を基に，先ほどお話したように絵本の見方についてもう少し詳しくお話をしていきましょう。
　私は，他の作家の人と話することはありませんので，また誰かに絵本の作り方を習ったわけでもありませんので，これは私だけのことかも分かりませんが，本の中には文章だけでなく，絵にたくさんの情報を入れてもらいます。
　例えばこの場面を見てください。男の子は黄色い帽子をかぶっています。これでもう，小学校の低学年，一年生ということが分かるわけです。
　このページを見てください。お兄ちゃんは怒りますが，手元には「やさしいおりがみ」という本が置かれています。本を読みながらでも折ろうとしているお兄ちゃんの気持ちが分かるわけなんですね。
　それから，この写真立てをみてください，お母さんとお兄ちゃんと妹３人の写真なんです。ということは，お母さんが１人で頑張って二人の子育てをしている家庭であるということが分かります。文章には一切書いていません。でも，絵を見ていただければ分かる。だからお兄ちゃんの頑張ろうとする思い，お母さんの頑張って欲しいという思いもあるわけです。でも，怒られてばっかり。今，僕の気持ちはそれでいっぱいなんですね。
　学校でも，女の子にカマキリを見せて，女の子が泣いたので怒られています。給食のときには，スパゲッティ山盛り入れて怒られていますが，目の前の男の子を見ると，よだれをたらして喜んでいますね。おそらく，この子が「いっぱい入れてくれ」と言ったのかも分かりません。
　仲間外れにされて，パンチをして，キックをして，友達を泣かせて。先生の顔を見てください。もう，怒る構えの顔です。そして，先生の第一声が「またやったの」。入学して３か月です。何が言えるでしょうか。

でも，この子，やさしいんですね。小さい生きものたくさん飼っています。猫も拾ってきています。拾ってきてまた怒られてるんですが，おそらく，この猫は，前のページ，帰り道に捨てられていた猫でしょう。昨日も怒られて，今日も怒られて，明日も怒られるな。そんな思いでとぼとぼ帰っているとき，捨てられた猫がニャーニャー鳴いてたら，この子はほっとけないのでしょう。

余計なことを言って怒られ，切ないですね。

「どないしたら怒られへんのやろ。どないしたらほめてもらえるのやろ。僕は悪い子なんやろか。せっかく小学校に入学したのに。せっかく１年生になったのに。」

どの子も胸ふくらませて入学してきますね。小学校に行ったら，広い運動場があって。図書室にはたくさん本があって。生活科では野菜を育てて。椅子に座って。教科書を使って。ノートに字を書いて，勉強する。音楽の時間はどんな歌を歌うんだろう。図工では何を作るんだろう。胸ふくらませて入学してきます。

でも，この子は今，怒られてばっかりという思いが先に立っているわけなんです。

そしてこの子が，小学校に入学してから教えてもらった平仮名で七夕の短冊に書いたのが，「おこだでませんように」。「おこられませんように」と書きたかったんでしょう。でも「おこだでませんように」となっています。

最初，きれいな鉛筆ときれいな消しゴムを描いていてくれていたんですが，これを書き直してもらったんですね。この子の鉛筆には歯形が入っています。消しゴムは折れています。

でも，よかったのは，この子の本当のお願いに先生が気が付いてくれた。というところですね。考えてみてください。先生に短冊を渡した瞬間に，先生から，「いや，まだ字間違うとんで。この前教えたでしょう。練習したでしょう」。こう言われたら，もう立つ瀬がないわけなんです。でも，先生はこの子の願いの奥底にあるものに気が付いて，すぐに黄色い短冊を掛けてくれています。

次のページ，家の様子を見てみましょう。実は，この子家でも短冊を書いています。でも，家で書いた短冊は，「おこられませんように」と，正しく書けているわけなんです。これはどういうことか。おそらく，先生が，「練習してみよう。書いてみよう，間違えてるところ直そう。」と，教えてくれたんでしょう。

どれだけうれしかったか。だから，家でも書いてみたんでしょう。

おそらくこの子ね，次の日，起きた時から，「早うご飯食べて」「早う学校行き」とお母さんに言われるかも分かりません。でも，何が変わるのか。お母さん帰ってきたときに，「まだ宿題してないの。」よりも先に，「遅うまでありがとう。」っていう言葉があるかも分かりません。

友達とケンカしたときに，先生からは，「またやったの。」ではなく，「どうしてやったの？」とちゃんと聞いてもらえるかも分からない。

それはこの子にとって幸せな状況になるというわけです。

これね，世界のバリアフリー絵本に選ばれたんですが，その時ね，「この男の子には何か発達障害があるのではないでしょうか。」そんな質問あったんですね。

私は退職するまでの７年間，特別支援教育のコーディネーターをやっていました。だから，その質問に対しての答えとしては，「この子に発達障害があるかどうか，それはちゃんと発達の検査をして，行動観察をしていなければ分かりません。もしも，この作品の中にバリアがあ

るとするならば，それはこの子を取り巻く周りの人の心の中にこそあるのだということ。それは，既成概念だったり固定観念であったり，先入観だったり，思い込みである。そういうふうなものであるわけです。そこに気が付いてもらえれば，選ばれた意味がある。」というのが私の答えなのです。

こういうことは，私たちの生活の中にもありますね。職員室の会話では，「今年の一年生は。」というふうな言葉が出てきたりします。「最近の若いお母さんは。」というような言葉が出てきたりします。一方，ＰＴＡの会で活動していると，「本当に若い男の先生は。」という声が聞こえてきたり，或いは「若い女の先生は。」，或いは「年配の先生は。」という声が聞こえてきたりします。みんな既成概念だったり，固定観念であったり，先入観だったり，思い込みであったりするわけです。

私たちはね，相手の心の動きや考えについて分かっているつもりで実は分かっていないことがあるのだ，ということを分かっていなければいけない。いろんな仕事，いろんな活動が進んでくると，慣れてきます。慣れてくると，尚更このことを忘れないでいただきたいと思います。

例えば，読み聞かせをするみなさんの前に子どもが座る。笑顔だからいいのか。その笑顔の向こうに涙がある子どももいるわけなんです。或いは，頑張って笑顔になっている子ども，笑顔を作っている子どももいるわけなんです。いろんな状況がその背景にある。先入観を取り除いて，それに気が付くことができるかどうかということです。

さあ，私の作品は，いろいろ繋がっているということをお話しました。

この兄妹。この泣いていた妹は，実は，『ぼくは なきました』という作品の中に登場します。このお母さんがそうなんです。あの妹が大きくなっています。

じゃあ，お兄ちゃんはどうなのか。お兄ちゃんは『ええたま いっちょう！』という作品の中に登場します。この男の子は『ええたま いっちょう！』では若いすてきなお巡りさんになって登場しています。

ぜひ，手に取って確かめてみてください。きっと，「あ，そうか。この男の子だからこういうふうなお巡りさんなんだな」っていうのが，分かっていただけると思います。

相手の心の動きや考えについて分かってるつもりで分かってないことがあるということを，分かっていなければならないということをお話ししました。もちろん大人同士でもそうですね。そのときに大事なのが，「想像する力」，「共感する力」であるわけです。

今，一緒にやったように，文章を読むだけではなく，画面を読むには，「想像する力」，「共感する力」がなければできません。

今，教育の現場ではコミュニケーション力のたいせつさが言われています。これは，思いや考えを伝える力という意味でのコミュニケーション力を指すことが多いです。

でも，もう一つ，この令和の時代，そして国際社会の中で生きていく子どもたちに，もう一つ，コミュニケーション力として，相手の心を察するとか，慮（おもんばか）るとか，推し量るとか，思いやる。こういう力も，たいせつなコミュニケーション力として付けてあげて欲しいと思います。

それは，本を読む中で育まれる，或いはいろんな人と会話し，関わっていく中で培われていく，「想像する力」，「共感する力」がなければできないことですね。

大学で教えていると，教職課程を取ってる学生がいます。どんな先生になりたいのか聞いてみると「子どもに慕われる先生になりたい。」そんな答えがよく返ってきます。大事なことで

す。でもね，もっと大事なことは「先生，先生。」と子どもたちが寄ってくる中で，一人離れている子がいたら，その子のことを一番に考えられる先生になって欲しい。いじめのアンケートの調査をして，結果を見ていじめがあるという回答がゼロだったら，それでよしとするのか。

そこに何度も書いては消し，書いては消しした後があれば，「本当にこの子は大丈夫なんだろうか。」，そんなことを考えられる先生になって欲しいと思います，それも「想像する力」，「共感する力」がなければできないわけなんです。

さあ，それではみなさん，「想像する力」，「共感する力」を働かせながら，この作品を聞いてみてください。

【くすのき先生による『あっ！みーつけたっ！！』の朗読】

『あっ！みーつけたっ！！』でした。

冒頭で「想像する力」，「共感する力」を働かせながら聞いてくださいってお願いしましたね。

小さい子どもが読むと，「この石が次は何になるんかなあ」と想像力を働かせることができます。でも，みなさん，大人の人だったらどうでしょうか。

例えば，この場面，困った顔で怒るお父ちゃんに僕は泣きながら，石を拾ったわけを話した。

では，お父さんは何が困るんだろうか。考えてみてください。

夜帰ってきて，この男の子にちゃんと晩ご飯を食べさせなければいけない。でも，次の日，病院に行くんだったら，準備するものもある。

そして，何よりもこのジャンパー，破れたこのジャンパーを着せて，病院に連れていってもいいものかどうか。それをお父さんは考えるわけなんですね。どうでしょうか。

この子がこんなに破れたジャンパーをそのまま着ていったら，妹にずっと付き添っているお母さんが何と思うでしょうか。おそらく，「私がずっと家に居てやれんから，この子は破れたままの服を着てる。」と思うでしょう。そんなことをお母さんに思わせたくないから，お父さんは縫うわけなんです。

最初，大島さんは，すいすいと縫ってくれてる絵を描いてくれてたんですね。でも，それは違うって言って直してもらいました。「お父さんが慣れぬ手つきで縫うもんですから，狙ったところに針を突き立てるようにしか縫えませんので直してください。」とお願いして，直してもらったんです。

それから，お兄ちゃんが作った動物園には家族の絵も入れてもらいました。赤い風船を持たせてもらってるんですね。

この家族は，一念頑張るわけなんです。これを見ながらね。「治ったら動物園に行こうな。行こうな。行こうな。」

妹のこの女の子も言うたでしょうね。「動物園に行ったら風船買うてな。」ってことも言うたでしょう。何度も言うたでしょう。だから，最後の場面ではちゃんと風船を買ってもらっているわけなんです。

想像する力，共感する力を働かせながら，こういう絵本の行間を読むことができるわけです。

これは，小児がんとかいろんな病気で長期入院してる子どもたちの交流の中で生まれた作品です。このモデルの女の子は亡くなってしまいましたが，作品の中では元気に生きて，生活しています。２作目『おにいちゃんさんかんび』では，幼稚園に元気に通っています。今，出版の準備を進めている３冊目では小学校に入学しました。

「想像する力」，「共感する力」のたいせつさ，相手の心を察する，慮る，思いやり。子どもの言動の背景には，家族の願いもあるということ。

さあ，そのたいせつな一人ひとりが輝くということを考えてみましょう。

この人物，分かりますね，野口英世博士です。

小さいころ囲炉裏に落ちて，左手を火傷して，「てんぼう，てんぼう」とからかわれて。それでも，それを克服して，アメリカに渡って，医学の道で，大きな研究の成果を残して。博士がアメリカにいるとき，日本から手紙が届くわけです。誰からの手紙か。聞いてみると，お母さんからの手紙である。（いやいや，うちの母はろくに字も書けないので，そんなことあるわけない。）と思ったが，実際に見てみると，本当にお母さんからの手紙である。

野口英世のお母さん，シカというお母さんです。

実際の手紙です。抜粋ですが読んでみましょう。

【くすのき先生による「野口英世に宛てた母からの手紙」の朗読】

これを読んで野口英世は，一時日本に帰国するんです。

親子読書研修会ということで，親子の話が多いですが，これも，子どもが親を思う気持ち，親が子どもを思う気持ちを書いた作品です。

【くすのき先生による『ふくびき』の朗読】

『ふくびき』でした。この作品の中で，姉弟はお母さんにバッグをあげることはできなかったけれども，親としてもらって一番うれしいプレゼント。子どもの中に素直な気持ち，正直な気持ちが育っている，やさしい気持ちが育っていること。そしてお母さんのことを思う気持ち

は，ちゃんと届けることができた。
見てください。ケーキを分けて食べていますが，やっぱりお母さんは，少し小さいんですね。そもそもがですね，このお母さんが，お姉ちゃんの話を聞いて，「そんなもったいないことして，アホちゃうの。どうして黙って持って帰って来んの。」とかいうお母さんだったら，このお姉ちゃんは最初から悩まないわけです。
この作品には人の世にありて，あるべき温もりも書きました。
私たち大人が忘れてはいけないことは，私たち大人が子どもたちの環境を作っているっていうことと，自らが環境であるということなんですね。この作品でいうと，お母さんもそうです。町の人もそうです。子どもたちと関わる，読み聞かせのみなさんもそうでしょうし，家庭では親であるみなさんもそうなのです。
環境のたいせつさで言うとね，2011 年，アフガニスタンで８歳の少女を含む 11 人が自爆テロを行いました。そういう環境に置かれると，好むと好まざるとに関わらず，そうせざるをえない子どもが今も世界中で，まだまだたくさんいるわけなんです。
一方こういうふうなニュースがありました。2012 年，ブラジルでゴミ袋に入っていた２万レアル,日本円で 78 万円を拾ったホームレスが警察に届け出た。ごみ袋を探していたんですから，食べるものはないか，着るものはないか　資源ごみはないか探していたんでしょう。出てきたお金で，服を買う，食べ物を買う，そういうふうなことも考えられたかも分かりません。
でも，このホームレスはちゃんと警察に届け出た。なぜか。その答えは，「盗みは絶対にしてはいけないと，子どものころに母から教わりました。」それが何十年かかってこのホームレスの行動を規定しているわけなんです。私たちは子どもたちの環境を作っていると同時に，私たち自身が環境なのです。今，みなさんが子どもたちにかける言葉，見せる姿，そして，手渡す本，一緒に読む本，そういうものが少しずつ少しずつ積み重なって，子どもたちの人格を作っていくんです。
子どもたちに伝えるべきこと，「生きる力」。もう 20 年あまり前ですね，教育改革の時に言われましてね，「生きる力」ということが。でも，たいせつなのは「自らの力でよりよく生きる力」，であるわけなんですね。
そのたくさんのヒント，モデル，これは作品の中にあります。
よく，教育の現場なんかでは，豊かな心を育ててって言っておりますね。
或いは，よりよく生きるとか心豊かに生きるということ。もちろん子どもたちだけではなく，私たち大人もっていうことです。
豊かさっていうことを考えてみると，これは，たとえば物の豊かさ，心の豊かさ，こういうふうに分けることができるかと思います。それ以外の分け方もいろいろありますが，まず一つ，こういうふうに分けてみましょう。
見えるもの，見えないもの，もちろんどちらもたいせつであるということ。物の豊かさ，情報機器が発達しているから，今こういうふうにオンラインで講演もできているんですね。同時に，精神的な豊かさ，心の豊かさも大事であるということ。教育の現場なんかでは特にこれが言われています。
では，私たちが子どもに関わるとき，どうすればいいいか？　一つね，こういうことを考えてみたらどうでしょうか。私たち大人が子どもたちによく，「あなたは将来何になりたいですか。」っていうことを聞きますね。そうすると子どもたちからは，学校の先生になりたい，野

球選手になりたい，サッカー選手になりたい，パン屋さんになりたい，花屋さんになりたい，大工さんになりたい，農業やりたい，といろんな具体的な職業が返ってきます。

それでは，「あなたは将来，どんな人になりたいですか。」こういうふうに問いかけたらどうでしょうか。

私は教育の現場でいる間，ずっとこれを問いかけました。そうすると，低学年では，何になりたいか具体的に答えることができない子でも，どんな人になりたいか，これは案外答えられるんです。どんな答えが返ってくるかというと，やさしい人になりたい，友達が多い人になりたい，嘘をつかない人になりたい，いつもニコニコしてる人になりたい，こういう答えがちゃんと返ってきます。

「何になりたいですか」で返ってくるのは「職業」。「どんな人になりたいですか」で返ってくるのは，「生き方」に関わる答えです。私は，この二つをもって，夢とか志として子どもたちにもたせてあげて欲しいと思います。これは，仕事につくこと，資格を取ることがゴールではないということですね。たとえば幼稚園の先生になりたいということだけではなく，どんな先生になりたいかを考えることによって，先生になるのがゴールではない。そこがスタートになるのです。「職業」と「生き方」。子どもたちには，ぜひこの二つを，夢とか志としてもたせてあげてほしい。そして，こういう夢や志のヒントは，本の中にたくさんあるのです。

私たち大人はどうでしょうか。みなさんに「将来何になりたいですか」と問いかけても，「いやもうなってますし，なって終わりましたし。」とか言うかもしれせんが。でも，「どんな人になりたいか」，「生き方」，これは考えられるわけです。

そして，それを考えるヒントが，身近な子どもたちにどんな人になりたいかって問いかけてみたときに，やさしい人になりたい，例えば，お母さんのような人。約束を守る人になりたい，例えば，お父さんのような人。友達が多い人になりたい，例えば，おばちゃんのような人。親切な人になりたい，例えば，おじいちゃんのような人。いつもニコニコしていられる人になりたい，例えば，読み聞かせに来てくれる誰々さんのような人。そういうふうに，子どもが考える，そんなモデルになるということも，私達が生き方を考えるヒントになるのです。

そう考えると，私たち自身が自分の人生をたいせつに生きるということに思いが至るわけですね。私たち自身が，子どもたちにとっての環境であるということです。

ＰＨＰ研究所 70 周年記念のときに，この『ニコニコウイルス』。これもね面白い作品なんです。続いて，『「ごめんなさい」がいっぱい』。それから『おにぼう』，それから『あなたの１日が世界を変える』この４つの作品が出版されました。

中でも『あなたの１日が世界を変える』，これは世界一番貧しい大統領ホセ・ムヒカさんの推薦の帯を得て，そして世界同時発売されたんですね。では，これについてお話をしておきたいと思います。

あなたの１日が世界を変える。何と壮大なことと思うかも分かりません。

どういうことかというと，地球上の人口を約 70 億人とすると，私たちは，数で言うと 70 億分の１ということがいえるかも分かりません。そうすると，その 70 億分の１の私が，今日１日，心穏やかに笑顔で過ごすことができれば，70 億分の１の世界が平和になっているというわけなんですね。２人だったら，今日来ているみなさんの中の誰かが，「そうやな，今日は帰って，ちょっとゆっくり過ごそうか。怒らんと１日過ごそうか。」と思っていただければ，70 億分の２。これは私１人のとき２倍，世界は平和になるということ。10 人なら 10 倍。100 人なら 100

倍ということですね。

今日来ているみなさんが，「今日は帰って穏やかに過ごそうか。今日の講演のこととかも，家族で話をしようか。」と思っていただけたら，一人の時より何倍も世界がよくなる。

こういうことを，なぜ考え方っていうと，私が 42 歳の時。厄年っていうのはあるんですね。

42 歳のときに，図書館の管理職，副館長で，館長は課長兼務でしたから，実質，全体のことをしなければいけなかったんですね。図書館改革，行政改革の最前線で 24 時間働いているような状況でした。その時に脳梗塞になったんです。左半身の完マヒ，場所が脳幹でしたから，即死でもおかしくなかったんです。そんな状況になったわけですよね。

その時にね，考えたのが，「１人で泣いてばかり，怒ってばっかりでは，70 億分の１の世界が平和でない。」と，逆にいえば「１日心穏やかに過ごすことができれば，少なくとも 70 億分の１，平和になっている」ということなんです。考えてみると，世界を舞台に活躍するということは，オリンピックに出るとか，ワールドカップに出るとか，そういうようなことだけではないわけなんです。日本にいても，今，この時，現在，１日１日を，自分の１日１日をたいせつに生きること。これは，実は，今からできる，一人でできる，大きな社会貢献であること。考えてみてください。みなさんが今日帰って笑顔だったら，家族も穏やかな気持ち，嬉しい気持ちになるなんです。読み聞かせで子どもたちの前に立つときに，ワクワクするような笑顔だったら，子どもたちもワクワクするわけなんです。そんな素敵な社会貢献はありません。

その時に考えた，毎日毎日リハビリをする中で考えたことは，「今日が輝く 10 の問いかけ」としてまとめてありますので，ぜひ，参考にしていただけたらありがたいです。

私たち一人ひとりがよりよく生きる，心豊かに生きる，これはもちろん，子どもにとってのモデルであるということだけでなく，自分の人生を自分の力でよくしていく，たいせつにしていくということなんです。今日という一日をたいせつに生きるという，これは今からできる，今日できる大きな社会貢献なんです。こういうことを書いたのが，『あなたの１日が世界を変える』なんです。

第１章では，今お話したようなことを，旅人がこの町で語ります。

そして，第２章では，この旅人の話を聞いた青年の人生を辿りながら，10 の問いかけについて，解説をしています。ぜひ，機会があれば，手に取っていただきたい。そして日本語と英語併記ですから，英語でも読んでいただきたいと思います。

この作品が，世界同時発売された時，海外からの手紙とか，外国の方からの手紙とかいろいろありまして，当時の駐日大使キャロライン・ケネディさんからも，お手紙をいただきました。この中にはね，アメリカ大使館のみんなで読みます，オバマ大統領に渡しますということが書かれていて，それはうれしかったですね。もちろん振り返ってみると，もっともっと自分の健康をたいせつにしておけばよかったなということは思います。

健康のたいせつさについて。よく健康第一っていうでしょう。コロナ禍で，みなさん本当に健康には留意されていると思います。健康第一，実はね，健康は数字で言うと１であるわけなんです。「１００００００」。ではこの０は何かっていうと，お金であったり地域であったり財産がやっぱり名誉であったり，肩書きであったりするわけです。どういうことか。健康第一の１があって初めて，１０になったり，１００になったり，１０００になったり，数字として意味を持つということなんですね。健康第一の１がなかったら，幾らお金があっても肩書きがあっても，名誉があっても，地位があっても，それは０が並んでいるだけで意味がないというこ

と。私のリハビリの体験とかね，それは全部この『ライジング父サン』という本の中に書いてありますので，機会を見て，また手に取ってください。

さあ，最後，このことをお話していきます。

『短編集　海の見える丘』，これ絵のない本と説明しましたね。こういうふうに，中身はなっています。イラストとかカットとかも全部のけてもらって，文章だけで，読者のみなさんの中にどういうふうな場面や情況が描き出されていくか，それをもって完成とする作品です。

時間があれば，先にこれを読んで，その後でもう一度，絵本の絵と見比べたりする。そういうこともしたかったんですけども，時間が押していますので，短編集の中を見ていただいて，実際の絵本について，読んでみてみましょう。

『のら猫のかみさま』，『短編集　海の見える丘』の中の作品の一つです。

これを読んで終わりたいと思います。

【くすのき先生による『のら猫のかみさま』（『海の見える丘』から）の朗読】

『のら猫のかみさま』でした。

本を読むこと，子どもたちに届けること，子どもたちと一緒に本むこと，そういうことが少しずつ少しずつ子どもたちの中に積み重なっていく。そうしたことが，この『のら猫のかみさま』では，年老いた犬が，母猫や子猫たちにしたことがまたつながっていく，といことでしょう。今，目に見える結果があるとかないとかそんなことよりも，今，積み重なったものが，やがて子どもたちの行動，考え，それを形づくっていくのだ。そういうことを，私たちは忘れてはいけないと思います。

ちなみに，これが『のら猫のかみさま』のモデルになった我が家の犬，クリームという犬ですね。もう亡くなってしまいましたが，本当にのら猫を大事にしていた犬です。

この，短編集は，この表題作『海の見える丘』，「幸せ」は自分が決める。『あたたかい木』，「生き方」が人生になる。『少年の太鼓』，「希望」は伝えられる。『のら猫のかみさま』，「優しさ」は受け継がれていく。そして『星のなる木』，「豊かさ」とは何か…。こういうテーマで書かれていますので，どうかね，また機会があれば手に取ってみてください。

「一人ひとりがみんなたいせつ」。これは一人ひとりが輝くという，それは一人ひとりの生き方がたいせつということですね。

「一人ひとりがみんなたいせつ」。子どもたちがということだけではないということ。私たち大人も同じ，私もみなさんも一人ひとりがたいせつということです。

これ，何か分かりますかね。これは，子どもたちが自分の将来を漢字一文字であらわしたら，

どんな漢字を選ぶかのベストテンです。「楽」，「明」，「夢」，「優」，「幸」，「光」，「和」，「希」，「輝」，「美」，子どもたちは，こういうイメージを自分の将来・未来にもっているわけです。逆に言うとコロナ禍でこういうふうなイメージを持てない子どもがいるとすればその子にはしっかり関わっていく必要があります。

どうでしょうかね，みなさん。今日がこれからの人生の最初の日とすると，みなさんのこれからの人生を漢字一文字で表すとするとどんな漢字を選ぶでしょうか。ここにある漢字の中でもいいですし，それ以外の漢字でもいいです。選んでみてください。

今日お話しさせていただいた，私たち一人ひとりがみんなたいせつということ，一人ひとりが輝きながら生きるということ。自分の人生，そして今日という１日を自分の意思でたいせつに生きるということ，生き方のヒントはいろいろな物語の中に，或いは関わっていくいろんな人の中にあるのです。

私は，これからも子どもたちの心を見つめて，笑顔のために，希望の物語を書いていきたいと思います。　ホームページやフェイスブックで情報発信をしていきますので，また機会があれば覗いてみてください。

このコロナ禍にあって，作家としてできることとして，こうした作品を作りました。

徳島には，「はぐくみ徳島」というのがあります。20 年続いています。そして，「おぎゃっと 21」というイベントを毎年開催していたんですが，中止になりました。去年も今年も中止になりました。そこでその代わりに，この絵本を作りました。『おでかけ』という本です。みんながマスクをせずに「おでかけ」できるようになったときのことを書いています。それを願って書いています。これは，「はぐくみ徳島」のホームページ，Ｗｅｂ「おぎゃっと 21」のページで読み聞かせ動画もありますし，無料でダウンロードもできますので，ぜひ，読み聞かせをされている方はご活用いただきたいと思います。Ｗｅｂ「おぎゃっと 21」，「はぐくみ徳島」というところ検索してみてください。『おでかけ』という作品です。

それから，「絵本・応援プロジェクト」。これも今年始めました。冒頭御紹介いただいたように，絵本と絵本に関わるすべての人を応援するプロジェクトです。もちろん入会は無料です。現在いろんな読み聞かせの方，それから本が好きな方，出版社の方，編集者や作家，画家，と多くの人が参加してくれています。絵本と絵本に関わるすべての人を応援しよう。自分も誰かを応援しようと思われる方。ぜひ，参加していただけたらと思います。

今日は，『一人ひとりがみんなたいせつ～作品に託す願い～』ということでお話をさせていただきました。どうでしょう。「絵本を読んでもらうのは，いいもんやな」って，思っていただければ，それだけでもよかったかと思います。

どうか，みなさんの人生に，たくさんの笑顔がありますように心から願っております。

では，講演を終わります。

ありがとうございました。